作品における〈動物らしさのリアリティ〉について

—紙を通り過ぎた馬の亡霊—

山﨑　成美（大学院造形研究科博士後期課程造形芸術専攻　作品制作研究領域２年）

Animal-Like Reality in My Own Works: The Spirit of Horses Passing through Paper

YAMASAKI, Narumi

造形作品として表象された動物が、作り物であるにもかかわらず、生きている実物を見たかのような錯覚を覚える場合がある。作品自体は実際に生きているのではないから、人の知覚のなかでそのような認識が生じているのであり、その認識を生む構造が作品にあるということだ。いいかえると、表象された動物に対する体験と、造形作品自体を見ることが重なりあい、一瞬、動物の実物像を生じさせるのだ。

知覚における馬のリアリティ

ところで、動物を表象するとはどこまで可能なのだろうか。他人の考えていることを知ることも難しいのであるから、人でありながら、人以外の何者かの持つ世界を語ることは、本当にはできない。例えば、犬から見た世界を直接感じ、語るということは出来ない。また、動物を客観的に写実的に描写するといっても、それは人から見た動物の姿のことであって、目が退化しているモグラや、ノミにとっての馬は、我々が考える馬とはおそらく違っている。

人が動物を描写するとき、描写した人間自身の視点が含まれることは避けられない。人が誠実に動物の何かを表現できるとすれば、それは姿の描写を含め、人との関係の中における動物の在り様くらいだろう。

造形作品の中において、動物の実物像につながる、動物らしさを獲得するヒントは、この「人との関係における動物の在り様」にあると考えている。したがって、動物のイメージをどう作るかという問題はここには含まれない。

私は制作の対象に馬を選んだ。それには理由がある。馬の世話をした経験から、大きさや毛の感触、臭いといった形以外の情報について少し知っていたからだ。

運動後、鞍を取り外したとき馬体から立ち上る湯気、汗の臭い、腹に浮き出る太い血管。海綿のように柔らかい唇に、細い針金のような毛がまばらに生えていること。側に立つと、馬の頭や胴といった部分でしか私の視野ではとらえられない程に大きいこと。馬に出会うことで、私は自分の知覚や体のサイズというものを強く意識させられた。私が馬を見る、触ると同時に馬も私を見て触っている。

当初、私は馬の姿を描いていたが、描かれた像が馬らしく生き生きと見えるよりは、馬を経験するための造形を探求するようになった。

作品の中で馬を発見する／見え方と見る行為

図１は 2011 年 に GALLERY OBJECTIVE CORRELATIVE（新宿区四谷）にて制作したものである。主にクラフト紙を使い実物大で制作している。図１は全体を見通せる場所から撮影した。

四本脚や大きさ、壁に繋がれているということから、馬であることがかろうじて分かるが、腹部はへこみ実物の馬の形には程遠い。近寄ると隙間が多く、結束バンドなどで紙が閉じられ、馬であることを伝えるよりは、紙であることを情報として強調している。毛の模様や目や耳などの細部描写は省かれ、退いて眺めなければ馬であることは分りにくい。

これらの紙の馬達は、ブラッシング、マッサージといった馬の世話を通して、体で覚えたことを思い出しながら大まかに作った。世話仕事の動きを再現しつつ制作するため、実物大に近づいて行くことになる。また、これらは壁に、実際の馬の引き綱と同じ太さがある麻紐で繋いである。

紙の馬の全体像が見通せるとき、細部を必要最小限にすることは重要に思えた。それは鑑賞者自身に、この紙の塊が紙の馬であることを自覚的に発見するよう誘導するためであった。素材をクラフト紙、結束バンド、ハトメ、といった文房具類でまとめたことも、概念化された馬という記号から遠ざかるためのアプローチである。馬の作り物を見つけたと近寄ってみると、クラフト紙の封筒や文房具というイメージに、目をくらまされる。そして再び、壁に繋がれているといった、馬のイメージが見つかるところに来て、馬であることを確認する。

もとより、実物の馬は退いて眺めなければ全体像を見ることはできない。図１の段階では、人が馬に出会ったときの馬の見え方と、紙の馬を見る行為を一致させることを試みていた。出来るだけ

図１　クラフト紙、結束バンド、ハトメ、リング、麻紐、釘
1400 × 2200㎜×６頭、2011

外見を似せずに、本物の馬の印象に近づくことを求めているからである。

この紙の馬達に備わっている馬らしさは、「大きさ」と「四つ足」、「壁に繋がれた」くらいのものだ。馬に近くで接したことのある人とない人、そもそも馬を知らない人の間では、見え方が全く違ってくるだろう。

表象の対象とされた動物を鑑賞者も知っている場合、動物の形が大まかに作られていても、実物大であれば対象となった動物の「動物らしさ」に近づける可能性がある。ここでの「動物らしさ」とは、人が動物に出会った際に把握している、人との体の大きさの違いである。

人という種としての私達の大きさは、それほど大きく変わるものではないとすれば、我々の体の大きさとの比較の中で、大きさの関係の中だけに、動物を感じることが出来る事もあり得る。ある大きさをもつ動物の気配のようなものが、そこには生じる。我々自身と、ある動物との大きさの違いは、作りものと本物とでも同じはずであり、その差異の実感は本物とはいえないだろうか。

図２　手前から奥３列目にいる左右２体を吊るしたところ（図１参照）

屠畜過程の模倣と痕跡

動物を表象することができるとすれば、姿の描写か、人との関係くらいだと述べた。これまでは人の認識の関係の中にある馬の姿を扱ってきたが、人との関係という視点では、人間社会の中で利用される馬、という一面も見逃せない。人を表現する場合に、外見だけで人とは何かを伝えられないのと同じだ。

荷運び、騎乗用、狩りの獲物、時には人間の友達として、人間社会の中の馬の様子は時代を問わず、芸術作品の中のあちこちに見つけることができる。私は、なかでも、生み出され殺されるという関係を扱うことにした。実行したことは、図１の紙の馬達を使って、馬が皮になるまでを模倣することであった。

図２、向かって右側のものは既に頭部と前足を

図３　《ハリー》梱包紙、麻紐、ニス、墨、ハトメ
1500 × 2150mm、2011

切断してあり、左側は吊るしただけである。これから腹部を縦に切り開き、血の代わりに切り開いた内部に水を流す。さらに紙に空いた穴から、色付きの水やニスも垂らす。その後さらに切り開いて行き、一つの皮になるような段階にまで整えていく。

《ハリー》(図3)、《ネーベル》(図4)は、さらに紙が切り取られた後である[註1]。背骨を中心として開いた状態であり、中央のパーツは胴体の内側にあたる。左右上下に広がる部分は、それぞれ首ないし脚の一部分にあたる。各パーツはハトメの付いた穴に麻紐を通し連結されている。麻紐は図1で脚に巻き付けていたものを使った。紐の上部を虫ピンで壁に固定している。紙の切断面にはニスが塗られている。

図5は、《ネーベル》(図4)の、装飾を描き加えた箇所を拡大したものである。黒い部分は墨、透明部分はニスを使っている。今回の制作のヒントの一つは羊皮紙[註2]だった。動物が一枚の紙になることと絵を描くこと、描くことと描く場を作ること、これらを行き来することも今回の制作に含まれていた。

屠畜の過程を模倣するのであれば、なぜ実物の馬に似せたものを解体しないのかという疑問が生

図4　《ネーベル》クラフト紙、麻紐、ニス、墨、ハトメ
1600 × 2130mm、2011

じる。しかしむしろ似ていないもので行うことこそ重要である。そもそも実物に似せたもので行うくらいならば、実物の馬で行うべきだ。似せるとはいったい何を似せるのか？似せるものは大量にある。怯える馬の様子か？大量に流れる血や脂の臭いか？消えゆく意識か？似せたものとは本物の代理物でしかない。

私が求めたのは、似せたもので屠畜を模倣し再現される解剖図のようなリアルさではない。ただ紙の馬は馬の代理として、私に殺されるために最低限、馬と認識できるものでなくてはならない、故に紙の馬なのである。そこでは「作って頭や手足を切り取る、壊す」という行為だけが実際と重なるだけである。

《ハリー》、《ネーベル》の外形は、実際の皮と似た所は持つが実物の皮とはズレがある[註3]。不格好なアウトラインや各パーツのつながり方、少しだけ左右対称であることは、紙の馬を作り、それを分解したことで生まれたが、この二作品は何か動物のイメージを生々しく喚起させるものとなっているだろうか。

図５　《ネーベル》細部

まとめ

作品として提示するのは《ハリー》（図３）、《ネーベル》（図４）である。その意味で図１の段階は原型というべきものだ。これらの制作過程は、馬を描写するというより、馬を対象とすることで、人の認識や接し方を紙というメディアに変換しようとしたものだ。そうすることで、単なる視覚的表象をはなれた実感の伴う作品としての生き物らしさとは何かを問うている。

プロセスの模倣と、扱われる素材の乖離という情報の扱い方は、我々の認識の中にある生き物のもつ「らしさ」を、実感としてどう構築するかの研究であった。まず、人の知覚において馬がリアルであるとは何かという問題があった。そこでは、人と動物との大きさの差異の実感が実物なのだと述べた。ついで、屠畜のプロセスの模倣をとりあげたが、これは行為の実物大という問題に繋がっていると考えている。

今後は、プロセスを模倣することと素材とを乖離させるというコンセプトを、支持体の問題と絡めて発展させていきたい。

註

1. 図２は図１の中のものであるが、《ハリー》（図３）、《ネーベル》（図４）とは別のものを解体している写真である
2. 羊皮紙は羊、子牛、山羊などの皮が用いられるのが一般的である。
3. 「吊るす」という展示方法によっても皮のイメージにつながっている